



Title	第10章 新咸臨丸第2回航海に寄せて
Author(s)	兼松, 泰男
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 9, p. 107-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第10章 新咸臨丸第2回航海に寄せて

兼松泰男 産学連携本部・イノベーション部・VBL/CLIC

発表まで、1時間、ラストスパート。何かが確実に違っていた。前日、米国学生達に押しまくられ、なすすべのなかったチームも、動き方が違う。話し方は、上達するべくもないが、伝えようという意欲がほとばしる。ジェスチャー、作業の手、アイコンタクトが飛び交う。凝縮された時間の中で、とどかない悔しい思いも含めて、ほんとうの意味での日米学生交流を、味わった瞬間だったのではないか。

昨年、咸臨丸就航150周年を機に、なんとしても新咸臨丸プロジェクトを立ち上げるということで、急ごしらえでスタートさせた。しかし、第一回は、北米学生の参加が得られなかつた。バックアップの負担も大きく、第2回は危ぶまれていた。

新年度やれるのか、やるのかという戸惑いの中、2011年3月11日の東日本大震災が起つた。しばらくは、新咸臨丸どころではなかつたが、米国側では、日本への関心が高まつてゐると言う。そして、危機を超えて行く道を若い人々が主体的に切り拓く、重要な事業として実施しようということになった。グローバルCOEプログラムをはじめ、基礎工学研究科、国際公共政策研究科、GLOCOL、VBLなど関係者にサポートを依頼し、合意を取りつける作業に入ったが、推進体制が整うまでに、多くの時間を費やした。

大学院生メンバーが最終的に揃つたのは、出航まで一月を切っていた。しかし、みんな、主体的で熱意のあふれたクルーであった。語学事前研修などの場を通しての、メンバー間

の交流や事前の相談、被災地ボランティアの学生グループとの交流が、メンバーのやる気を引き出したということかもしれない。何より賞賛すべきことは、メンバーの自主的主体的な取り組み。米国学生と熱く関わって、コンテスト応募という形にまとめあげていったこと。次期船長・副船長を中心に、来年度に向けて、動き出していること。

新咸臨丸プロジェクトの方向性が見え、意義が認識できた。まさに危機の時代、大学に閉じこもるのではなく、社会にそして世界に視野を広げ、実際に関わる。社会的な要請に応えた学びと成長の糧を、そして、きっかけを得る上で、有効かつ必要なプロジェクトだ。

冷静に考えてみると、未曾有の震災と引き続く原子力災害という事態が追い風となつてゐる。この windows of opportunity がいつまで続くのか。むしろ、これを契機に、若い感性の中に呼び起されている変革の風に依拠し、真剣な取り組みを進めよう。

最後に、今回、かなり無理をした執行となり、多くの方々にご迷惑をおかけしました。それにもかかわらず、関係者の方々に、多大なるご支援をいただいたことに、心より感謝いたします。とりわけ、震災への取り組みでお忙しい中、貴重な時間をさいていただいた、岩手大学小野寺純治先生、宮城県庁半澤太一様、矢部優司様、大阪大学渥美公秀先生、たいへんありがとうございました。